

わたしたちが世界のためにできることを考えよう

氏名 : 小林 真一

学校名 : 福島県本宮市立五百川小学校

担当教科 : 総合的な学習の時間

実践教科 : 総合的な学習の時間

時間数 : 12 時間

対象学年 : 第 6 学年

人数 : 39 名

【実施概要】

【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：

開発途上国の抱える諸問題やフィリピンに関する写真や映像資料、フィリピンのストリートチルドレンへの励ましや応援する活動を通して、開発途上国で暮らす人々の現状と問題を理解するとともに、相手の立場に立って今の自分や将来の自分ができることを考えて実践できるような資質や能力を養う。

【2】 単元の評価 規準	（ア）よりよく問題を解決する資質や能力	開発途上国で暮らす人々について、目的や相手に応じて自分が伝えたい情報を取捨選択してまとめ、伝えようとしている。
	（イ）学び方やものの考え方	開発途上国で暮らす人々の現状を知るために、目的や相手に応じて、調査方法、記録の仕方などに留意しながらそれらを用いて調べている。
	（ウ）主体的、創造的、協同的に取り組む態度	既存の知識と共通体験を通して得た気付きの違いなどから開発途上国で暮らす人々に関心をもち、開発途上国の現状を考えようとしている。
	（エ）自己の生き方	開発途上国で暮らす人々の立場に立って考え行動することの大切さに気付き、自分のできることを考えて実践している。
【3】 単元設定の理由	（1） 児童観 児童全員が、日本人であるが、一人だけ中国人の母親をもつ児童がいる。海外生活経験者はおらず、国際問題や開発途上国についての意識や知識、関心は高いとは言えない。これまで自分たちの住む本宮市をより住みやすい街にする為、自分が大人になっても済み続けたいまちづくりをテーマに、市役所や町の人々などにインタビューしたり、魅力あるまちづくりについてインターネットで調べたりしながら、主体的に学習に取り組む姿が見られた。また、グループごとに課題を設定し、協力して解決、表現する力も身につけてきている。	
	（2） 教材観 今回は、JICA の国際問題や国際協力に関する諸資料を活用するとともに、教師が海外研修で繋がったフィリピンを題材に、開発教育や開発途上国で暮らす人々の現状や諸問題、社会の実情について知ることができるよう教材を開発する。教師が繋がりを感じたひと・もの・ことについては、児童もより身近な存在として問題をとらえたと考えたからである。また、その繋がりを現実的なものにするために、映像や画像を通してより身近なものとして捉えさせることができるような教材を準備していきたい。さらに、NGO の方々に生の声を聞くことで、現地の人々が本当に必要としている支援や、将来にわたりできることなど、自分ができる	

	る支援の在り方に生かせるような教材として活用していきたい。 (3) 指導観 上記のような資料を活用し、主体的な問題解決のプロセス(「知る」「思いを高める」「調べる」「発信する」)を促すために、国際問題や支援を身近に感じさせていくことをもっとも大切にしていきたい。また、訪問したドロップインセンター(フィリピンのストリートチルドレン支援施設)に通う子どもたちを応援できるような方法を考えたり、プレゼンテーション資料を作成したりする際には、相手の立場を大切にしながら活動できるように、現地の子どもの現状や発表する相手を明確にする。さらに、振り返りやまとめの機会も大切にする。ことで本単元の実践意欲を高め、継続的に国際社会に貢献しようと行動する姿を評価する機会を意図的に設ける。
--	---

【4】展開計画(全12時間)

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1	<知る段階> ○国際社会に起こる様々な問題について知る。	(1)「もし、世界が100人の村だったら…」をもとに講義・演習を受ける。 (2)世界中で起こる諸問題についてジグソー法を使ってグループごとに調べ、報告会を行う。 	○もし、世界が100人の村だったら… (福島県国際協会) ○JICA地球ひろば ・砂漠化する惑星 ・世界の食糧 ・世界の水問題 ・いのち、輝け! ・学校に行けない世界の子どもたち
2 本時	<思いを高める> ○貧困に直面する子どもたちとの関わりから国際協力への意欲を喚起する。	(1)フィリピンの現状を写真や映像で知る。 (2)資料をもとにどのような生活をしているのか想像する。 ・学校について ・勉強について ・親について (3)ドロップインセンターで過ごす子どもたちの様子を知り、応援できそうなことを話し合う。 (4)応援のための準備をする。	○研修の際に撮影した画像や映像 ○ドロップインセンターに通う子どもたちの様子が分かる資料 ○東日本大震災の支援を受けた先生の話

3	<調べる> ○「今の自分」と「未来の自分」に出来ることを調べる、探す。	(1) 特定NPO法人アイキャンで働く方々から本当に必要な支援の在り方について聞く。 (2) 身の回りにある自分の出来そうなことを探す。 (3) 未来の自分に国際社会において出来そうなことを手紙に書く。	○私たちが目指す世界子どものための「持続可能な開発目標」～2030年までの17のグローバル目標（ハンドブック） ○どうなってるの？世界と日本（JICA）
4	<発信する> ○協力を呼びかけたり自分の意志を表明したりするために、外に向けて発信する。	(1) これまでの国際協力についての学びをまとめてプレゼンテーションを作る。 (2) 保護者や地域の方々に発表する。	

【5】本時の展開

過程時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (30分)	1 「どっちがフィリピンクイズ」によりフィリピン、ドロップインセンター子どもたちの現状を知る。 (1) 日本とフィリピンを比較できるような写真から (2) 路上で生活する人々の様子が分かる写真や映像から ・地面から分かる衛生面 ・幼児の服装 ・にぎやかな街の様子 ・子どもたちの様子 (3) ドロップインセンターに通う子どもたちの資料をもとにどのような生活をしているのか想像する。 ○ 水について ・食事 ・トイレ ・お風呂 ○ 生活時間について ○ 将来の夢について	○ 貧困面や不衛生といったマイナス部分のみならず街中の活気や陽気な雰囲気についても触れフィリピンの持つ、独特の雰囲気についても感じ取ることが出来るようにする。 ○ 平日の日中であることや地面の様子、幼児の服装などの視点を与えることにより路上で生活している人々の生活について具体的に捉えることが出来るようにする。 ○ 想像させるとともに教師が体験してきた実際の様子について事実を伝え、路上で生活する人々の生活について具体的に捉えることが出来るようにする。 ○ ドロップインセンターに通う子どもたちの背景や現状を説明し、具体的な応援方法を探すことができるようなヒントとする。	○ 研修の際に撮影したフィリピンの画像や映像、線路沿いからドロップインセンターまでの映像や写真 ○ 研修の際に撮影した線路沿いからドロップインセンターの映像や写真

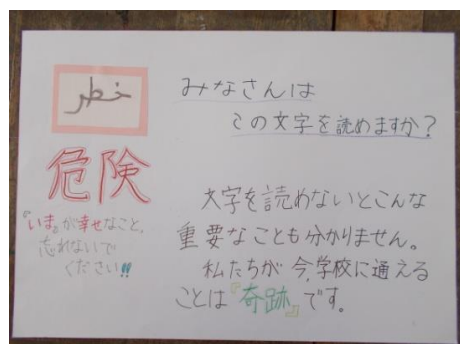
展開 (50 分)	2 ドロップインセンターで過ごす子どもたちを応援する方法を以下のことから考える。 ○ 「かわいそう」を超えた気持ちを引き出すことから ○ 自分がしてもらってうれしいことから ○ 東日本大震災の支援を受けた教員の話から 3 ドロップインセンターの子どもたちを応援するために考えたことを準備する。	○ ドロップインセンターの子どもたち及び本学年児童が国際交流することにより、互いの視野を広げることができるようにするとともに相手意識を持って応援できるような方法を考えさせることができるようにする。 ◇「自分がしてもらってうれしいこと」や「東日本大震災の支援を受けた教員のお話」をもとに相手意識を持って応援の方法を考え、準備しようとしているか。	○ 東日本大震災の支援を受けた際の体験談や支援物資の写真
まとめ (10 分)	4 本時をまとめる。 ・ 感じたこと ・ 考えたこと ・ 応援方法への意気込み	○ 本時を通して自分の中で変容したこと、新たに発見したことなどについて問うことにより、学びのよさを価値付けるとともに応援の準備をする意欲を高めることができるようにする。	

【授業実践の様子】（本時での写真を添付し、キャプションをつけて下さい）

T：教員 C：児童

前時「学校に行けない世界の子どもたち」を調べたグループの発表を全体の前で行う。

C：皆さんはこの文字を読めますか。



C：わからない

C：これは「危険」という文字だそうです。

C：文字が読めないと「危険」という文字も意味も分かりません。

C：文字が読めないと生活の中でたくさんの困ることが出てきます。

C：文字を学ぶために学校はとても大切な場所ですが世界には学校に通えない子どもたちもたくさんいます。

C：私たちが、学校に通うことができることは奇跡なのです。

<拍手や感嘆の声がもれる>

T: 今日は今の皆さんの発表を受けて、先生が行ってきたフィリピンの学校に行けない子どもたちのことについて考えていきたいと思います。

T: フィリピン？日本？クイズ！（※以下、フィリピンの写真を見た子供たちのつぶやきを表記する）

T: この写真はフィリピン？日本？



C: フィリピン！前の方にブロックで出来た建物がある！

C: 後ろのビルはCGじゃないかな？

T: 高層ビルと路上生活をしている人がすぐ近くですんでいるんだよ！

T: この写真はフィリピン？日本？



C: 同じコカコーラの自動販売機だけどこちらは、広告が日本語で書かれているから日本（先生の家近く）のもの、こっちはゴミ箱に英語が書いてあるからフィリピン！

T: そうだね！フィリピンでは英語が話されています。あとはタガログ語も話されているよ。

T: なぜ英語が話されていると思う？

C: 植民地の時代が長かったから！

T: その通り！

T: この家はフィリピン？日本？



C: フィリピン！

T: このような家に住んでいる家族もいるのだよ！

C: 差が激しいね～。

C: あっ今度の写真は、長縄をしている！



T: 跳んでいるのは校長先生なんだよ！

C: え～

C: みんな笑顔だね！

C: 長縄で楽しめるのは日本もフィリピンも同じだね！

T: この乗り物はフィリピン？日本？



C: フィリピン！

T: そうです。ジプニーといってね、通学に使ったりするんだよ。

T: この一台に何人くらい乗ると思う？5～7人くらい乗れちゃうんだよ

C: え～すごい！

T: この写真はフィリピン？日本？



C: フィリピン！

T: ここは、アイキャン 子どもの家と言ってね、親から暴力を受けたり、親の記憶がない子どもたちが入っていたりする施設なのだよ。

T: 先生は少しの時間でも父親の代わりになればと思って、昔、息子にしていたように寝る前の読み聞かせをしたんだ。そしたらこんなに真剣に聞いてくれたんだよ。

T: 支援するって募金だけでなくこんなことでも支援になるのではないかって、その時、実感したんだ。

T: ここは、ドロップインセンターといって親が働いていて子どもの面倒をみれなかったり、学校に行けない子どもたちが通う施設だよ！

T：お絵かきしてる！

T：悟空（ドラゴンボールというアニメの主人公）を描いてる！

T：日本のアニメが大人気だったよ！先生のへたなドラエモンの絵も喜んでくれたよ！



T：じゃあ今度はこの路上生活をしている線路からドロップインセンターまでの道を VTR で撮影したから気になるところは「ストップ！」って言ってね！



G：ストップ！セブンイレブンがある！日本と同じだ！

G：ストップ！リュックを前に背負っているね。

T：なぜだと思う？

G：後ろに背負っていると盗まれちゃう？

T：正解！

G：ストップ？午前中って言っていたのに制服を着た学生がいっぱいいる。

T：フィリピンの学校は2交代制なんだよ！

G：学生はリュックを普通に後ろに背負ってる

T：そうだね、なぜだと思う？

G：強盗は学生を狙わない！

G：お金持っているのは旅行者！

T：このジョリビーは、フィリピンではマクドナルドより有名なくらいのハンバーガーショップなんだよ。

G：バイクに2人乗り、ノーヘルメットだ！

T：いよいよドロップインセンターのある通路に入ったよ。緊張したな。

G：昼間から大人が闘鶏をして遊んでる！働かないのかな。

G：入り口が鉄格子だ。

G：強盗や不審者が入らないようになのかな。

T：たくさんのことを見つけ、考えたね～！

T：いよいよドロップインセンターに入りました。

T：ドロップインセンターというのはね…。そうそうトイレは水を汲んでおいて用を足した後、自分で流すんだよ。

G：え～、信じられない！

T:じゃ今度はこの中にいる2人の友達的生活を見ていこう
 その前に誰か日本の小学生の生活を見ていこうか、そうすると比較できるよね。

T:日本代表は…隼大くんの生活を見てみよう。
 1人目はマイケル君（巻物のように見せる）、2人目はマリアフェさん。

G:二人とも少しぐらい貧しくても夢を持っているし、両親を大切に思っているんだな～

T:このようにフィリピンやフィリピンの友達についていろいろ見てきたけど、実はこのドロップインセンターで働く羽根さんからお願いされたことがあるんだ。

T:小林先生の担任している子どもたちに是非ドロップインセンターの子どもたちを応援してほしいってね。

G:やってみたーい

T:やりたい人！
 （多くの児童の手が上がる中、躊躇する女の子2人を見つける）

T:どうしたの

G:本当にこの子たちを応援できるものを作れるか心配なんです。

T:どうして？

G:マイケル君やマリアフェさんのためになるものがすぐには思い浮かばなくて…

T:みんなはMさんの気持ち分かる？

G:分かる、分かる！贈る相手のことをよく考えると本当の応援の方法は簡単じゃないと思っているのだと思います。

T:みんなもそう思う？

G:そう言われるとその通りだね。簡単には「はい！」とは言えない…。

T:贈る相手のことをよく考えているからこそその心配だね！それは素晴らしい悩みだよ。

T:それを少しみんなで話し合ってみよう！

T:実はこの中に今までみんなに贈り物をしてもらった人がいます。

G:あ、隼大くんだ

G:5年生の時、盲腸で入院したときみんなで贈り物したよ。

G:あーそうだった。

T:隼大くんはどんな気持ちだった？

G:嬉しかった！

T:どんなことがうれしかったの？

G:僕の名前が入った替え歌を作ってくれたり、僕の好きな車の折り紙を折ってくれたり、心配してくれている気持ちのわかる寄せ書きをもらった時、僕のことを考えてくれているんだなって嬉しくなった。

T:相手の気持ちを考えるってことが大切なんだね。

G:替え歌のVTRを見たときは笑顔になったよ。

G:笑顔になってもらうことも大切なんじゃない！

G:そうだね。大切だね！

T:実はもう一人いるんだけど…。

G:え～、だれ？

T:2組の人だよ！最初に「う」のつく人。

G:浦山先生

T:正解。

T：浦山先生は東日本大震災の時、被災した学校に勤めていて、その時支援されたものを整理する担当だったんだって。その時にどんなものをもらった時嬉しかったのかお聞きしてみましょう。

T：ここに一覧表があります。これから読み上げるものの中からどれが嬉しかったか当ててね。

＜一覧表を読み上げる＞

T：このように私たちを心配してくれているメッセージや思いの込められた寄せ書きが嬉しかったです。T：寄せ書きはアメリカの人が日本語でメッセージをくれたものもあってみんなで感動しました。

T：ということは「相手のことを考えること」「笑顔・スマイル」「一人ひとりを思いながら」「相手の好きなことを考えて」というのが大切なんだね。

T：じゃあ今度はドロップインセンターのみんなにどんな応援ができそうか考えられそう？

G：（女の子たちもここにこしながら…）はい

T：じゃあこの付箋一枚に1つのアイデアを書いてみよう

＜付箋にそれぞれが考えたアイデアを書き込む。＞

T：実は先生、この授業をするのにずっと悩んでいました。先生は毎月募金をしているけど、募金することが困っている人を本当に応援することなのかって疑問でした。所詮、先生の力じゃ世界を変えることはできない、そんなふうに思っていました。このように考えている先生がみんなにどんな授業ができるんだろうとずっと悩んでいました。

でもね、アイキャン子どもの家で絵本を読んでもる時に思ったんだよ。応援する方法は、募金するだけじゃないって。先生でもできることがあるって。少しでもお父さんを感じてもらえた時そう思ったんだ。だから、みんなもそんな応援の方法を考えられるといいなと思います。

G：先生みんなで協力すればできるよ！

T：じゃみんなでがんばってみるか！

G：はい

T：よし、じゃあ今日の授業で感じたことや考えたことを忘れないようにノートに書いておこう！

【6】本時の振り返り

- 導入の中で前時までに児童が調べた「学校に行けない世界の子どもたち」の発表を全体の前で行い、本時の課題意識を高めるのは、主体的な態度を育てるために有効であった。
- 「フィリピン？日本？クイズ！」では、フィリピンの現状を知る上で必要な写真及び、その後の授業に必要な知識を引き出すために必要な写真を精選した。写真を見ながら発せられたつぶやきを共有することにより、教師のねらいを児童が自ら発見したかのような気づきを引き出すことができた。
- ドロップインセンターの子どもたちの一日の過ごし方と、同じ学級の友達の一日の過ごし方を比較したこと、そのスケジュール表を絵巻物のように少しずつ見せながら、次の活動を予想させることにより、ドロップインセンターの子どもたちの現状に関心を高めながら、自分事としてとらえることができた。
- 応援するドロップインセンターの子どもたちのことを考えたプレゼントを贈ることができるか不安であるというつぶやきを取り上げ、その不安を共有することでより深く、相手の立場に立った応援の方法を考えることができた。また、東日本大震災で被災した学校で支援物資を受け取る担当をされていた先生にその時に児童に喜ばれたものが何かを聞いたことも大変有効であった。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

- 世界で一人でも幸せになれるよう、幸せって感じることをできるように自分でもできることをどんどん見つけてそれを実現していきたいと思いました。

- マイケル君やマリアフェさんの夢は人を助けたりみんなを笑顔にする仕事だった。この人たちの地域は心の広い人たちで溢れていると思う。
- マイケル君やマリアフェさんの夢は人の役に立つ仕事だった。その夢をあきらめずに追いかけてほしいと思いました。
- マイケル君の夢は兵士。命がけの仕事。ぼくは兵士になる勇気はない。マイケル君は勇敢な男の子だと思った。
- 自分の力で笑顔を届けられたらいいな。
- 応援するための贈り物をするとき「かわいそう」とは思わず、「こっちもがんばっているよ！そっちもがんばってね！応援しているよ！！」という思いをもって作りたいと思います。
- マイケル君やマリアフェさんの夢に関係するようなプレゼントをしたい。
- マイケル君やマリアフェさんが生きるため、生き抜くため、幸福を感じるために物乞いしているところは日本とは大きく違う。そういうところに住んでいるからこそ生きていることを実感できる時があると思う。
- マイケル君やマリアフェさんは、しっかりと夢を持っているところがすごいと思った。だから応援するものを作るときには心配、かわいそうと思うのではなく、うれしい、楽しい、生きててよかったと思ってもらいたい。そのために一生懸命考えて心を込めたものを作る必要がある。
- マリアフェさんの「常に美しくいたい」というのは、心の中のことなのか、外見なのか、衛生面のことなのか聞いてみたいと思いました。きっとそのどれもなのだと思います。
- どんな工夫をすれば笑顔になれるか、何をわたせば役に立つのか、喜んでくれるのかなど相手の気持ちになってマイケル君やマリアフェさんが希望をもてるような応援することのできるものを作りたいです。

本時の授業の感想として上記のような感想が記載された。これらの感想より児童はマイケル君やマリアフェさんをはじめとするドロップインセンターの子どもたちのことを自分事としてとらえながら、同情だけではなく同じ年頃の子どものための尊敬の気持ちや関心を高めながら応援しようという意欲の高まりが見られるようになった。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲】

この話し合いを通して、具体的に以下のような応援するためのものの準備が始まり、現在、意欲的に作成中である。

- 日本の遊びを紹介するチーム
 - ・お手玉 ・ドングリごま ・紙コップけんだま → 映像で遊び方を紹介するとともに道具も送る
- 手作りお守り
 - ・フェルト布を縫って作るお守り → 校長先生が神主のため、ご祈祷してもらう
- 寄せ書きメッセージ
 - ・大きな布に思いを込めたデザインをし、そこに寄せ書きをする
- 千羽鶴
- 絵本 → 自分のお気に入りの絵本を英訳する
- 劇 → 外国語活動の教科書「Hi friends」に載っている英語訳を活用して桃太郎の劇を演じ VTR に収録する。
- VTR チーム → 上記の活動を映像に撮りダイジェストを作る

帰宅後もそれぞれの準備を進める児童が多く見られる。	
【途上国・異文化への意識の変容】	
（単元前・授業前） 児童全員が日本人であるが、一人だけ中国人の母親をもつ児童がいる。海外生活経験者はおらず、国際問題や開発途上国についての意識や知識、関心は高いとは言えない状況であった。教師が今回の研修に参加すると知らせても「海外旅行に行くのですか？いいな！」という言葉が聞かれた。帰国後、お土産や撮影してきた映像を通して、フィリピンの現状や国際問題について関心をもつようになり、単元に入ると徐々に国際問題に目を向けるようになった。ただ、だからといって自分はどうしたらよいのかというところまでには至っていなかった。	
（授業後） インターネットを活用し、自主学習でフィリピンの政治や現状、貧困や格差、ゴミ問題について等、途上国や異文化につて調べてくる児童が多く見られるようになった。また、国際問題やボランティア、支援や援助について新聞の切り抜きを学校に持参し、お知らせコーナーに貼って、帰りの会などで紹介する児童（係）も出現した。 卒業に向けた感謝の贈り物を考える際にも、「フィリピンの学習で学んだように…」と相手の立場に立って考えようという発言が聞かれた。	

【8】自己評価

1. 苦勞した点	事前研修では様々な手法を学び、現地の情報を得た。事前研修においてあらかじめ単元・授業構想を作成したがやはり現地に行ってみないと具体的なイメージを持つことは難しかった。現地における研修では、とにかく多くの材料（写真や映像・人とのつながり）を集め、教材に出来るものを探した。帰国後はそのたくさんの材料から自分の思いが子どもに伝わるにはどうすればよいかを思い悩み続けた。 心に感じる授業は「どのように」教えるのかはもちろん、「何を」教えるかを自分に問い続けなければならないと改めて痛感した。それがあって初めて「どのように」が有効になるのだと思った。 また「どのように」という点では、いかに授業を受ける子供たちに臨場感を与え、自分事として捉えてもらえるようにするか、というところに力点をおいた。予定ではアイキャンの協力でドロップインセンターの子供たちとスカイプでつなぎ、本時の展開をより臨場感溢れるものにしようとしたのだが、そのような要望が多いということで断られ断念した。ただ、その代案としてアイキャン・フィリピン事務所の羽根様の協力により、ドロップインセンターの子供たちの生活の様子や願い、希望などを教えて頂き本教材を作成することができた。
2. 改善点	「何を伝えたいのか」という視点で研修を受けるとよいと思う。貧困なのか、学校に行けない子どもたちへの支援の在り方なのか、ゴミ問題から立ち上がろうとする人々を助ける方法についてなのか。具体的に「何を伝えたいのか」をカテゴライズし、研修を受ける方々の視点を作っておくとよいと思う。また「どのように」という点においては、できれば現地とスカイプやテレビ電話等で繋ぐことができるのが最良であると思う。無理であれば海外研修中にインタビューを予定し、映像におさめてくるとい

	う方法も考えられる。
3. 成果が出た点	授業を受ける児童にとっての成果はこれまでの記述の通りである。さらに私自身の成果としては、国際理解教育について人と人との繋がりを作れたことが大きい。ともに学び合う仲間、適切な助言をくださるコーディネーター、そして支え続けてくださった JICA 東北、JICA 二本松、JICA フィリピンの職員皆様。困ったことがあれば相談させていただける、嬉しいとき・悩んだとき・行き詰まったときに声をかけてくださる、そのような関係を築けたことは今後末永く国際理解教育を推進していく上で、また教師として歩いていく上で大きな財産である。
4. 備考（授業者による自由記述）	本授業を構想するにあたり以下のようなことを考慮した。これは、本研修に参加し、帰国後に強く感じたことでもある。 (1) 教師が肌で感じたこと、心が震えたものを画像や映像を使って教材にする。 ○路上生活を送る子供たち (2) 教師が現地でつながった人々と児童をつなぐ。 ○路上生活をしている子供たちの背景や実状・夢・思い ○青年海外協力隊の方々の思い、やりがい、 ○NGO で働く方々の思い、やりがい、苦悩 (3) 本当に必要な支援について伝える。 ○現地で感じた、考えた支援の在り方 ○JICA や NGO で活動されている方々から聞いた本当に必要な支援の在り方 授業を受ける児童が、これらの途上国・異文化への意識を変容すればと思い授業を実践した。今回の授業を実践してみて途上国・異文化への変容という点で、本研修で受けた衝撃や感動、支援の在り方を以下のような文章に表しておくこととする。 居酒屋でバイトしながら日本に来たいと言っていたマーク。 教室の陰から恥ずかしそうに最後まで僕たちのバスを見送ってくれたタナワン第二小学校の女の子 （小数のわり算ができるようになってよかったね。） パロ第一小学校で踊りを教えてくれたアンジェロ。 互いの震災や特別支援教育のことを熱心に語り合ったパロ。 友達のために作っていたミサガを譲ってくれたサンタクルス村の女の子たち ノリノリでいっしょにダンスした DonAlejandro Sr. Science-Technology High School のみんな 僕の小指を水色に染めてくれた将来の夢はネイルアーティストの女子高生 世界を変えることはできないかもしれないけど、一人のためになら、なにかできるかもしれないと思いました。 それは、話を聞いてあげること それは、一緒に悩むこと それは、ともに笑うこと それは、よさを認めること

	それは、励ますこと そんな大切なことに気付かせてくれてありがとう。 この気持ちは、一生忘れません。 そしてこの気付きは、教え子へ、息子へ伝えます。 帰国直後、新幹線の車窓から見える東北の景色は、とてつもなく美しかった。 澄み渡る空気に青空と夏草の緑のコントラスト。 電車の中で小さな子連れの親子に席を譲るひと。 日本とはなんと美しい国なのだろう。 これからも、この美しい国「日本」から美しい心のまま、世界の「あなた」のことを思い続けます。
--	--

添付資料：

フィリピン研修で撮影した画像，映像

河北新聞の切り抜き

認定 NPO 法人アイキャン・フィリピン事務所から頂いたドロップインセンターの子供たちの生活の様子等

参考資料：

JICA で出されている地球問題に関する小冊子

- ・ JICA地球ひろば
- ・ 砂漠化する惑星
- ・ 世界の食糧
- ・ 世界の水問題
- ・ いのち、輝け！
- ・ 学校に行けない世界の子どもたち